Japanese Association for Estuarine Science (JAES)

汽水域研究会 NEWS LETTER

2022.9.30
24号

大会（研究発表会）ご案内

汽水域研究会2022年（第14回）佐賀大会　開催について

汽水域研究会2022年（第14回）大会を佐賀大学をメイン会場として、11月12日（土）・13日（日）の２日間にわたり開催いたします。

本大会のテーマは、『閉鎖性の強い汽水域の環境を考える』です。初日はエクスカーションを実施して、貸切バスにて国内最大の干満差がある有明海の干潟などを巡ります。二日目は佐賀大学にて２件のシンポジウム「有明海：広大な浅海域の生態系と産業」「閉鎖性の強い汽水域における人為改変による環境変化と生態系の変化」を開催します。なお、一般発表についてはポスター発表のみ受付いたします。

みなさまの奮ってのご参加お待ちしております。

3年ぶりに現地開催決定！

【会期】　2022（令和４）年11月12日（土）・13日（日）

【会場】　佐賀大学（佐賀県佐賀市本庄町１）

【スケジュール詳細】

11月12日（土）
- 13：00～17：00　エクスカーション（有明海の干潟観察他）
- 17：10～18：00　総会（会場：佐賀大学）

11月13日（日）
- 8：30～11：00　シンポジウムI「有明海：広大な浅海域の生態系と産業」
- 11：00～12：00　一般ポスター発表
- 13：00～15：30　シンポジウムII
  「閉鎖性の強い汽水域における人為改変による環境変化と生態系の変化」

※シンポジウムⅠ・Ⅱは招待講演のみとなります。

【申込】　①エクスカーション参加、②一般ポスター発表（発表要旨の作成が必要です）、③講演要旨購入希望については、事前に申込が必要となります。

【締切】　10月25日（火）　【申込方法】　メールもしくは郵送による受付

【主催】　汽水域研究会
【共催】　島根大学エスチュアリー研究センター
佐賀大学SDGsプロジェクト研究所浅海干潟域プロジェクト
【協力】　鹿島市干潟交流館

※　詳細は汽水域研究会ホームページ（右記QRコード）、メーリングリスト等でお知らせします。
※　新型コロナウィルス感染症拡大状況によっては一部変更または中止となることがあります。

（事務局長・大会幹事）

大会のみどころ

佐賀大会のみどころ

コロナ禍で延期していた汽水域研究会の佐賀大会を本年11月12日～13日にやっと開催できる見通しがたちました。ご存じのように佐賀県には国内最大の干満差（約6.8m）を持つ有明海があります。そのため、有明海は閉鎖性の強い湾であるにもかかわらず大きな潮汐に伴う物質循環が活発であるため，国内でも最高水準の生産力をもつ海域です。また、有明海ではその大きな干満差によって形成した干潟が広がっています。その総面積は日本国内全体の約40%を占めるほどです。干潟は自然豊かな汽水域の環境をもたらしています。2015（平成27）年5月には、佐賀市の東よか干潟及び鹿島市の肥前鹿島干潟がラムサール条約湿地に登録されました。特に、東よか干潟は、ズグロカモメ、クロツラヘラサギ、ホウロクシギなどの絶滅危惧種を含む水鳥類の国内有数の渡りの中継地、越冬地となっています。有明海北西部に位置する鹿島市の干潟では、干潟の上で行う運動会である鹿島ガタリンピックが1985（昭和60）年度から開催されています。

本大会では、このような干潟を感じられるエクスカーション（巡検）を初日（11月12日）に準備しています。まず鹿島市干潟交流館の周辺で、有明海の干潟と潮が引く様子を観察します。また、東よか干潟ビジターセンター「ひがさす」では、干潟に関連する様々な展示物や干潟のパノラマ展望台によるムツゴロウなどの生物の姿も観ることができます。さらに、エクスカーションは、干潟だけでなく、お米の有名な産地である佐賀県をもっと知っていただくために、日本三大稲荷の一つに数えられている鹿島市の「祐徳稲荷神社」の見学も用意しています。

二日目（11月13日）は、「閉鎖性の強い汽水域の環境を考える」を共通テーマにした２件のシンポジウムを開催します。シンポジウムⅠは「有明海：広大な浅海域の生態系と産業」、シンポジウムⅡは「閉鎖性の強い汽水域における人為改変による環境変化と生態系の変化」をそれぞれ個別テーマにして、多彩な招待講演者による貴重な話題を提供していただきます。

３年ぶりの汽水域研究会の佐賀大会へのご参加を心よりお待ちしております。

鹿嶋市ガタリンピック開催場の様子（左：満潮時、右：干潮時）

（大会幹事）

会誌Lagunaについて

Laguna (汽水域研究)は汽水域研究会の会誌であり年1回以上発行しています。
現在は第29巻まで発行されています。

受理済み論文等はオープンファイルとして汽水域研究会ホームページ上で公開しています。

査読が必要となる論文、総説、短報、報告・資料、口絵以外にも、汽水域に関連する情報の提供や紹介をする寄稿・記事の分類があります。会員の皆さんの積極的な投稿をお待ちしています。

（編集幹事）

特集記事

都市景観と汽水域

大濠公園の全景 （提供：福岡県）

中国浙江省杭州市にある西湖は、「人と自然の協働による生み出された景観」として2011年世界文化遺産に登録された。西湖は東シナ海に注ぐ河口付近に位置する潟湖である。南宋の首都でもあった杭州市の歴史的遺産群が西湖の自然とともに創り出した親水景観は、歴史・文化と都市・観光とを調和させた比類なきものとして、中国で最初の国家重点観光名所となった場所でもある。

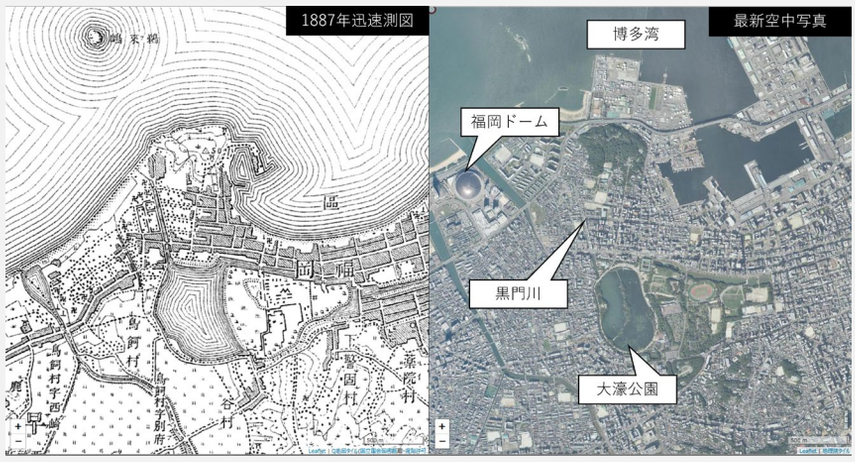
その景観を参考に、今から約100年前の1929年に都市型親水公園として整備されたのが、人口160万人都市福岡市の中心地区にある大濠公園である。約40ヘクタールの公園の中心には、かつて福岡城の外堀としても機能した外周2kmの大濠池がある。明治時代発行の地形図をみると、この池は博多湾で発達した陸繋砂州（トンボロ）によって取り残された水域である。江戸時代（1709年）に出版された筑前國続風土記には、海の魚が泳いでいる記述も残っている。大濠池は、この水域を周辺整備して誕生した。

戦後、大濠池は黒門川を通じて外海とつながっていたため汽水湖として存在していた。実際、1980年代前半まではクルメサヨリ（汽水種、福岡県RDBでは絶滅危惧ＩＡ類）が多数生息していた。しかし、たびたび海水が侵入する浅い水深の池であるがゆえに、貧酸素水塊による魚の死滅・腐敗が発生して、公園としては似つかわしくない悪臭漂う水場になってしまった。それを食い止めるために黒門川に水門を設置して淡水環境にしたところ、今度はアオコの大量発生で悪臭問題は解決しなかった。

問題解決のため、たびたび埋め立て計画が持ち上がる。しかしながら、都会のオアシスを維持するために周辺住民が約10万にものぼる署名を集め、池の景観維持を訴え続けた。昭和末期、ついにその願いは通じた。福岡県は12億円を投じ、池の水を全部抜いてヘドロを日干しつつ凝固剤によって地層を固めるという池を維持するための浄化工事を行った。また、水質浄化（ろ過）施設を整備して、環境悪化を防ぐ策を講じた。これによって、都会のオアシスとして現在まで美しい姿を私たちにみせてくれている。

池がある大きな都市公園として、東京上野恩賜公園も有名である。その公園内にある不忍池も大濠公園と同じように、これまで幾度も埋め立て・消滅の危機を迎えていた。しかし、そのたびに住民が守ってきた歴史がある。

都市景観を構成している汽水域の産物は、水産資源としての利用は少ない。しかし、社会のオアシス、レクリエーション資源としての文化的価値は高い。その歴史を紐解くと、汽水域研究がこれまで突き詰めてきた開発と保全のバランスが重要となる。佐賀にて３年ぶりに現地開催される汽水域研究会。ちょっと足をのばして大濠公園を散策するのはいかがでしょうか？



（左）1877年迅速測図（小倉近傍1/50,000スケール）、（右）国土地理院最新空中写真に一部加筆　今昔マップ（https://ktgis.net/kjmapw/）により作成

（情報幹事）

書籍紹介

タイトル：汽水域に生きる巻貝たち
～その生態研究史と保全
著者：和田恵次（著）
出版社：東海大学出版会
定価：3,000＋税
発売年：2018年
ISBN：978-4-486-02167-4
中身のポイント：汽水域に生息する巻貝12種の生態的特徴をそれぞれ紹介して、汽水域の多様度を理解できる。汽水域によく出現して化石にもなりやすいウミニナの話は実に面白いです。

関連学会（大会）紹介

◆ 第70回日本生態学会大会
会期：2023年3月17日～21日　5日間
形式：オンライン（3/17-20）、仙台国際センター（3/21）
詳細：https://esj-meeting.net/

◆ 日本地球惑星科学連合2023年大会
会期：2023年5月21日～26日　6日間
形式：ハイブリッド（現地＋オンライン）
会場：幕張メッセ（千葉県）
詳細：https://www.jpgu.org/

※日程および開催形式は変更となる可能性もあります。
詳細HPをご参照ください。

コラム

汽水域になりたい！？

広辞苑によると、汽水域は「海水と淡水とが混入している所の塩分濃度の低い水域。汽水湖、内湾、河口部などをさす」と定義される。いま、この汽水域に新しい概念が生まれつつある。

「汽祭域」－これは東京大学学園祭の今年のテーマである。汽水域から派生した造語である。そこには、多様な背景をもった人々が東大生と混じり調和する。東大生はその大きな変化に適応し、創意工夫で乗り越える。新たな価値観を創造する、といった意図が込められている。このテーマ設定の背後には、前年に東京大学が示した基本方針「UTokyo Compass」が関係する。SDGs（持続可能な開発目標）が広く社会に浸透する中において、大学など教育機関においても、社会全体の流れに逆らうことなく、ジェンダーやダイバーシティに関する意識の向上が求められる。新しい価値観をもち、お互いを尊重する気持ちをもつこと、社会の変革に対して自身を適応させていく力を養うことが書かれている。東京大学は汽水域になれるのか？それを本気で考えはじめているようだ。

汽水域の研究は、塩分を基準とした揺れ動く境界領域を対象とする。そこには上流の淡水域、下流の海水域も含めての総合的な理解が求められる。また、汽水域という独特環境を学際的にみる視点も重要である。つまり、横断的な考え方をもち、多様的に事象を認識してきた私たちの歩みが、汽水域の新しい概念を偶発的に生み出したのかもしれない。これからの社会を生きるための素養を「汽水域」と表現することに、会員のみなさんは、どのような感情を抱くのだろうか。

就職活動の定番フレーズに「潤滑油になりたい」がある。協調性をアピールするものとしてよく使われている。近い将来「汽水域になりたい」がそれにとって代わる日も近いかもしれない。

（情報幹事）

会員数（2022年9月30日）

正会員： 80名（ +2 ）、賛助会員： 5名（ ±0 ）、
学生会員： 41名（ ±0 ）、計： 126 名
#カッコ内は2022年3月31日からの増減を示す

編集後記

ニュースレター第24号は３年ぶりの現地開催となる佐賀大会の告知を中心にしました。みなさんと佐賀でお会いできること楽しみにしています（山）

汽水域研究会ニュースレター第24号 2022年9月30日発行 編集・発行：汽水域研究会
〒690-8504 島根県松江市西川津町1060島根大学エスチュアリー研究センター内 汽水域研究会事務局
office.rgbwa@gmail.com　0852-32-6450 (phone&fax)